

博士学位論文  
論文の内容の要旨

氏 名 吉 村 彰 史

学位の種類 博士（社会福祉学）

学位記番号 福博（甲）第1号

学位授与の日付 平成26年3月20日

学位授与の条件 学位規則第4条第3項

学位論文題目 「仏教福祉思想の研究」

論文審査委員 主査 教授 三 友 量 順  
副査 教授 清 水 海 隆  
副査 教授 梅 澤 啓 一  
副査 教授 高 橋 堯 英（文学研究科）

論文の要旨

本論文は、主として（1）仏教福祉を実現するための福祉行為主体の思考と行動の基本モデル、および（2）仏教思想やその実践の現代的意義、の二つについて論じた。

第一章「仏教福祉思想の枠組み—原始仏教経典を中心として」では、仏教福祉を『縁起』の理法に基づいて、『福祉（利益・幸福・安楽）』の実現を目指す、『慈悲』の実践」と捉え、原始仏教経典に基づく仏教福祉思想の枠組み（思考と行動の基本モデル）について論じた。

釈尊の説いた教えには、時代や社会を超えて誰もがその実現を願う普遍的な理法（ダルマ）がある。「縁起」の思想は、「すべての現象は無数の因や縁によって相互に関係しあつて成立していること」を意味するものであり、これが「ダルマ（法）」の原理である。人間はダルマ（法）をよりどころとすべきであるが、そのダルマ（法）を実践するのは他でもない人間であるからこそ、釈尊は「法によれ」と説くと同時に、「自己によれ」とも説いた。すなわち、ダルマを実践する「よるべ」となる援助者自身の「自己の確立」が必要である。

また、他者に対する「慈悲」は、自己自身に対する内省を基としている。我々は、自分自身がかげがえのない存在であり、また「自己が一番愛しい」という利己的な人間存在である

ことに気付く。だからこそ、他者も同じく他者自身の自己をかけがえのない存在として、また愛しい存在として思っているのではあると気付くのである。そして、生きとし生けるものはみな、それぞれ自己自身が愛しく、幸せを求め、死や暴力を恐れているからこそ、「自他を尊重」し、「自分も相手も傷つけない (ahimsā)」というあり方が慈悲の実践として求められるのである。

自己を確立するためには、諸行無常・諸法無我である現実を直視しつつ、人間や社会は縁起的存在として存在していることをあらためて認識し、自己のあり方を振り返りながら他者との関わりのあり方を問い直すという姿勢が必要となる。そのためには、自らの「行為」すなわち身（身体的動作）・口（言葉づかい）・意（心のあり方）の三業それぞれにおいて、粗暴な行為をつつしみ、悪を離れ善いことを行う「止悪修善」によって、自己をととのえるべきである。

その中で、他者との関わりや種々の人間関係の中で起りうる「負の感情」、特に「怒り」「怨み」「慢心」に対しては、他者との優劣や勝敗に執著することによって対立がおこること、対立関係においては自分が優れていると思うという慢心がおこること、また対立関係における「負の感情」の連鎖は友好的対人関係を築くには無意味であること、ということを知り、したがって優劣や勝敗に執著せず、たとえ他者にそうした感情をぶつけられたとしても、こちらは種々の「負の感情」を静め、堪え忍ぶと言う態度が結果的に双方の利益となることを知るべきである。自他ともに傷つけない、つつしみ深い行為が善、自他を傷つける粗暴な行為が悪と言えるが、自己の「行為」が自己の「業」のもととなり、その行為の善・悪の結果は自己のもとに必ず戻ってくることに留意しなければならない。

自己においてはこうしたことを念頭におきつつ、足ることを知り（少欲知足）、謙遜を忘れずに、学びと向上につとめ励むべきである。

次に、どのように慈悲を実践し、積極的に善をなすかと言えば、他者にとって「善き友」となることによって、可能な範囲で相手の苦悩を除くことが奨励されている。「善き友」は、穏やかで相手にとって好ましい言葉を語るべきではあるが、過ちは過ちであると指摘し、相手を訓戒し教諭すということも「善き友」としての役割である。

他者をあわれむことは、単に同情するというのではない。物質的な援助も必要であるが、人間の身体や生命も無常なるもの・無我なるものであるという事実に気づかせ、ありのままに受け入れることができるようにサポートすることが、苦しみを抜くということの本質である。

利他的なはたらきかけとしては、他者に対して親切であること・与えることに加えて、「分かち合うこと」が奨励されている。ただし、他者を害することによって与えること、自己の利を求めて与えること、あるいは無思慮に自己を捨てるように与えること等は否定される。

また、たとえ悪い行いをした人や、怠っていた人であっても、謝罪や懺悔があればそれを受け入れて「怨する」（ゆるす）べきこと、また、そうした人が後に善によってつぐなうならば、その人の更生する可能性を信じるべきである。

また、人間は多かれ少なかれ、他者のはたらきによって自分自身の生存があるということ、すなわち他者の「恩を知る」ことが奨励されている。

さらに、他者に対して寛容であることも奨励される。種々の見解の相違があるときに寛容を導く方法として、一つは見解の一致しない点についてはそのままにしておき、見解が一致する点について注目し議論を深めるという方法である。いま一つは、人間は自分が経験したことによって見解を立てており、それぞれが体験した限りにおいての真実を語るのだから、それぞれの見解はものごとの全容ではないが部分的に真実を語っているという視点に立つことである。これらによって論争を超えた立場に立ち、「共に学ぶ」ことに意義を見出すべきである。

以上のように、自己をととのえながら自己の確立と自他の尊重をはかることによって、人々の心の平安や社会の和合を導き、自他共に傷つけない、幸福・利益・安楽の実現を目指すべきであると考えられる。

なお、社会福祉における重要な援助技術の一つとして「自己覚知」があり、これは援助者としての自らの専門性の維持・向上のためにも、またクライアントとの適切な援助関係構築のためにも必要不可欠であるといわれている。また、対人援助職におけるストレスやメンタルヘルスに関する研究において、近年では「バーンアウト」や「感情労働」が関心事となっている。

確かに、組織の一員である援助者が、対人援助の場において、種々の感情や行為を完全にコントロールしたり、葛藤を回避したりすることは容易ではない。こうした問題に対し、縁起や慈悲の思想は、相互関係性の中に生きる人間存在の「かけがえのなさ」や、人間存在の「弱さ」を視座とする人間観を示している。援助者においては、そうした視座から自己の人間観について振り返ることも1つの方法として有効であろう。さらに、本論で示した原始仏教に基づく思考と行動の枠組みは、上記のような人間観・社会観に基づき、自己と他者の双方を意義ある存在と捉え尊重しつつ、「他者のためをはかる」という視点に立つことによって、援助者自身が種々の「負の感情」から「離れる」方法や、対立を回避するためのアプローチの一端を示していると考えられる。

第二章「大乘菩薩道の仏教福祉的理解—『大智度論』を中心として」では、大乘菩薩道における仏教福祉の思考と行動のモデルとその現代的意義について、『大智度論』を取り上げて論じた。大乘仏教の志向する「福祉」は、一切の衆生を対象とし、大乘の菩薩道に則った実践によって身体的・精神的・社会的な種々の側面にはたらきかけ、自他共に人間としての完成を心がける営みである。

大乘の菩薩の実践は、その前提として一切衆生を度さんとする発心・誓願が必要である。そして、三十七道品をはじめとする種々の実践徳目はすべて「六波羅蜜」に収斂する。菩薩は六波羅蜜を行じ、自利・利他の行を継続しながら、二乗に退転することなく、また涅槃に入ることもなく、人々を成熟へと引導していく存在である。

六波羅蜜はそれぞれ密接に関連しつつ、般若波羅蜜に統合せられる。般若波羅蜜は諸法実相を悟る智慧であり、一切諸法は空であるという思想がその基本にある。菩薩はこの畢竟空

の立場において菩薩行を継続すると同時に、様々な方便をもって六波羅蜜の実践を衆生にも勧めていく。

慈悲は菩薩精神の中核を担っているが、四無量心、特に無縁の慈悲を行じてそれを具現化することが菩薩の慈悲の理想である。関係者への憐憫の情は誰でも起こし得るが、自他の壁を超越して無縁の者にも人間としての価値を与え尊重することは容易ではない。無縁の大悲は空観を修することによって自己の執著を離れた自他不二の立場からの実践であり、空観と大悲は、方便力によって等しく調御されるべきものである。

また、福祉の対象としての他者は、自己の完成を願う菩薩から見れば福田としての存在意義を有している。

空の思想は、日常の生活上の種々の問題を主体的に解決可能なものとする思考法としても捉えられる。これは、時代や社会を問わず、普遍的な営みとしても実践可能なものと考えられる。菩薩の実践は檀波羅蜜に始まるが、それは空観と大悲を通して、怨親平等の捨(upekṣā)の精神と和合している。そして、種々の方便によって他者の本来的な「主体性」、すなわち人生におけるさまざまな「ふしあわせ」な状態を前向きに受け止めより豊かに生きていこうとする心を回復させ、他者もまた同じ福祉行為主体である菩薩としての能動的な生き方へと誘うのである。

さらに、仏教福祉における六波羅蜜の現代的意義について、「忍辱(kṣānti)」を取り上げて考察を加えた。「忍辱(kṣānti)」について、Monierはpatient waiting for anythingの意味を掲載しており、「忍ぶ」「耐える」だけでなく、「寛大であること(寛容)」や「(何かを)待つ」というニュアンスを含めて理解していることは示唆的である。

「待つ」ということの重要性は、子育て、教育、登校拒否・不登校の問題、カウンセリング、あるいは看護の分野など、社会福祉に関連するさまざまな分野で指摘されている。理想的な人間関係を構築するためには「待つ」ことが必要不可欠であるが、一方で「待つ」ということは、待つ者にとって種々の難しさや精神的苦痛を伴うこともある。

現代的な解釈においては、「待つ」ということを「忍辱」の中に連絡づけて解釈する必要がある。「待つ」ことは「相手のためをはかる」ことであり、その行為の中に相手への「尊敬」の念が込められていることが、仏教福祉的な「待つ=忍辱」であると考えられる。

第三章『法華経』における仏教福祉の思想では、『法華経』における仏教福祉の思想とその現代的意義について論じた。

第一に、『法華経』における人間観として、援助実践における自己認識と他者理解について考察した。援助者が「菩薩」としての自覚と内省をもって他者に関わることは、仏教福祉の行為主体の自己認識において基本的なあり方であろう。しかし、『法華経』の「一乗」思想によって導かれる人間観によれば、関わる対象としての他者もまた、この世に「菩薩」として生まれ、共に人間としての成熟や社会の平安を求める存在として捉える他者理解が示されるのである。こうした人間観・援助観に基づき、身体的・精神的・社会的にさまざまな支援やサポートを行ないながら、被援助者自身も含め、自他ともに「菩薩」としての本質的平等性や尊厳性に目覚めることができたとき、そこに真の喜びが共有されることになるで

あろう。

第二に、『法華経』を釈尊と弟子たちの「対話」というコンテクストから捉え、仏教福祉的なソーシャルワークのモデルを検討した。「対話」は、人間の過去の経験や行為を否定的に捉えるのではなく、「一乗」思想に基づきどのような行いも「菩薩」としての「理法（善きところ）」の実践につながるものとして肯定的に捉えなおすことを志向するものということができる。そして、「対話」は人間の持つ「仏性」への信頼を前提とし、他者と共に人間としての成熟や社会の平安を目指す存在（菩薩）として生きていくように自己を再構成していく、といった方向性を示すものである。

社会福祉の領域においては近年注目を集めているナラティブ・アプローチ（narrative approach）・エンパワーメント（empowerment）・ストレngths視点（strengths perspective）等の特徴は「人間に内在する強さ、回復力、潜在的可能性に焦点を当てることによって、自己や現実の再構成を指向するアプローチ」ということができる。これは、従来の社会福祉援助における「問題を個々人の内的要因に帰属させ、それを援助者は病理や欠陥と認識し介入し、被援助者は受動的・依存的にその診断に従って治療を受ける」といった医学モデルや病理的視点による援助論と比べると、被援助者が自分自身で主体性・能動性を発揮し、自分らしく生きていくことを支える援助方法として、首肯できるあり方と言えよう。

本論文における『法華経』の考察によれば、『法華経』も「人間に内在する強さ、回復力、潜在的可能性に焦点を当てることによって、自己や現実の再構成を指向するアプローチ」を持っていると言える。しかし、『法華経』におけるそうしたアプローチの特徴は、被援助者が自己や現実を再構成していく中で単に主体性・能動性を発揮するというだけでなく、自分も他者のために生きることができるという「菩薩」としての自己存在の価値や、人間として生きる意味への気づきといった、被援助者自身の人間観・生命観の抜本的な転換や内的充実をもたらした上で、よりよき生のあり方や「生きがい」の創出をもたらすことを示唆していることである。こうした『法華経』の思想に基づく仏教福祉のアプローチは、上述の一般のソーシャルワーク・社会福祉援助が目指す問題解決のあり方に比べ、より人間存在の本質に迫ったアプローチを提示しているといえることができる。

第三に、「法華七喩」を個別の事例として検討した。その結果、「法華七喩」には他者の個性を尊重し、本来的に持っている変化・向上の可能性を信頼し、自律性や自己への信頼を回復させるために物質的・精神的にさまざまな手段を講じ、忍耐強く寄り添うという援助観が示されていることが確認される。すなわち、「三車火宅の喩」「長者窮子の喩」「三草二木の喩」「化城宝処の喩」「衣裏繫珠の喩」「髻中明珠の喩」の六つの譬喩物語は、菩薩としての自己認識や他者理解を促すという点においても効果的な役割を果たしているといえることができる。また「良医治子の喩」は、「死」は単なる「悲しみ」ではなく、その「死」の「悲しみ」を通して自らの「生」のあり方に気づくという視点、あるいは死を意義のあるものとして受け止める視点を示唆しており、こうした視点は現代のデス・エデュケーションの分野からも注目されると考えられる。さらに、この「良医治子の喩」は、『法華経』における「願生」思想と対照させると、人間のいのちは福祉の実現を願って生まれるという点、そして

死の「悲しみ」はよりよき「生」のあり方についての有益な示唆を与えるという点など、人間の「生」のあり方や「いのちの尊厳性」のありようを考えるための重要な発想を提供するものである。なお、七喻全体を通しては、福祉行為主体が積極的に利他行を行うという側面よりも、さまざまな手段を講じながら、相手が自分自身の生のあり方に気づき、自己実現を目指すことを「待つ」という側面を読み取ることができる。

第四に、『法華経』における菩薩行について考察した。『法華経』には、生きとし生けるものに対する利益、幸福、安寧への願いが随所に表現されている。そして、他者の痛みや悲しみを感じ取り、忍耐強く寄り添い、喜びを共有してゆくという菩薩のあり方が示されているのである。

第五に、『法華経』虚空会の象徴性について考察し、理法とその実践の場の普遍性を指摘した。そして、生きとし生けるものの幸福を願い、「但行礼拜」の精神をもって他者に積極的に関わっていくことが、『法華経』に基づく仏教福祉実践のあり方ということができるのである。

第六に、『法華経』に基づく「共生」や「寛容」の実現の方法について考察した。人間社会における「共生」は、異なる者同士が相互に変容し合い、新たな関係を築いていく中で、相互理解や異質性の尊重を必要とする。そのためには他者に対して「寛容」であることが条件の一つと考えられるが、西洋における寛容は、他者への関心や理解、あるいは尊敬の念が無くても成立し、ともすれば他者への優位性から相手をゆるす、という意味を含んでいる。一方、『法華経』の菩薩行を集大成している常不軽菩薩の実践は、そうした「寛容」のあり方を超えている。『法華経』には、慢心を抱く者や敵対する者たちが登場するが、常不軽菩薩の行為は、そうした相互理解が困難である相手に対する有益な示唆を与える。彼は、出会ったあらゆる人々を礼拜したが、この行為は、あらゆる人々の中に成長・向上の可能性があることを人間の本質として尊重する姿勢であるだけでなく、彼らが理法に気づき、理法を求める心が起こるのを「待つ」という姿勢、あるいは自己自身が慢心を反省するという姿勢をも示すものである。さらに、彼の行為は人間が共に生き（共生）、共に菩薩として仏に成る（共成）ことを目指すために、人間の本質を尊重し「自他ともに傷つけない」という仏教福祉の実践のあり方を、「相手を積極的に敬う」という行動によって示したものと理解できるのである。

以上のように、『法華経』には、あらゆるものごとを「気づき」を促すものとして積極的に捉え、他者の痛みや悲しみを感じ取り、忍耐強く寄り添い、喜びを共有してゆくという仏教福祉の理念が示されているということを指摘した。

第四章「日本仏教における仏教福祉の思想—日蓮を中心として」では、日本仏教における仏教福祉の思想として日蓮を取り上げ、日蓮遺文における仏教福祉の思想とその現代的意義について論じた。

第一に、日蓮の思想と行動は、自分自身の深い内省を通して他者へとかかわり、宗教者としての自己の使命を果たさんとするものであった。自己の内面についての反省は、福祉的な視点から換言すれば、自己覚知を促進したり、あるいは援助対象である他者を一方的に理解

してきたつもりになっているという慢心に対する反省を促す姿勢を示唆するものであるといえよう。そして、一人の凡夫でありながらも、慈悲の心をもって衆生の苦しみを自分自身の身に受けながら共に救済されることを目指すという「代受苦」の姿勢は、仏教福祉の視点から見れば、援助者の矜持をどのように保ちその使命を果たさんとするかということについて、現代の福祉実践に携わる人々に対して再考を促すものである。

また、日蓮の他者理解の根幹には、そうした自己の内省を踏まえた上での、他者への積極的な感謝・報恩がある。日蓮には、敵対者を含めた全ての他者を「自己の存在を明らかにしてくれる」存在と捉え、感謝と敬意を表すべき恩の対象としてみる他者理解が基盤にある。したがって、その言動がたとえ批判的・折伏的であっても、そこには他者への感謝と敬意が込められているということを見落とすべきではない。

十界互具・一念三千の理論によれば、人間界は仏界も地獄界を具しており、仏界も人間界や地獄界を具し、地獄界もまた仏界や人間界を具している。十の世界をこうした人間存在の十のあり方として捉えれば、これらの理論は自己の中の仏界・菩薩界の一分を育むことを教えると同時に、地獄界や餓鬼界といった悪道に通じる危険性を持つ自己への内省をもたらす。また他者に対しては、相手の苦しみを共に受けながら、他者の中に積極的に仏界・菩薩界があるのを見出していくという視点をもたらす。援助臨床においても、そのような自己認識と他者理解をもって人間関係を結んでいくことは重要であろう。

「知恩報恩」の思想は、「共生」の要件として現代に活かすならば「共に感謝し、共に敬う」と双方向的に解釈されるべきであろう。また、「共生」を実現するためには、「開会」の思想に基づき、お互いを「活かす」という視点から、人々が相互に主張していくことも求められよう。そのとき、「知恩報恩」は「受容」や「共感的理解」、「傾聴」等といった現代の社会福祉の援助方法論や、相互理解のあり方の限界性を越えた、他者への「寛容」の実現にもつながる思想となる。

第二に、日蓮の檀越たちへの手紙を見ると、現実の人間関係の中で生起する不安や問題に対し、時には仏教的な視点から、時には通俗的な視点から、さまざまな助言を行っていることがわかる。そうした中では、日蓮は特に命を大事にすることや、たとえ理不尽な出来事であっても他の人を怨んだり憎んだりすることなく、他者への恩と敬意を忘れずにいることを説いている。また、そうした手紙においては、日蓮は現代のカウンセリング理論でいえば自己一致や無条件な肯定的配慮、相手の内面的世界への共感的理解などの援助者としての態度を示し、また明確化や感情反映・言い換え・要約、情報提供やリフレーミングなどの技法を用いていると言える。

特に身近な人（親、子）との死別を経験しそうな人、あるいは経験した人に対しては、日蓮はそうした死別の悲しみや精神的な不安に対する心のケアを行っている。日蓮は「人の命は無常である」という無常観を持ちながらも、悲しみに暮れる人の気持ちを察して代弁し、故人の冥途や霊山往詣のありさまをその状況が目に浮かぶように書き記すことによって、そうした人々の悲嘆に寄り添っている。

また、数週間から数年にわたり、遺族に対して幾度もしたためられた手紙の内容と説示

のプロセスを見ると、単に宗教的な供養・追善といった意味合いだけでなく、加えて現代のグリーフケアでいえば故人との「継続的な絆」、つながりを感じさせているということが特徴の一つとしてあげられる。また、日蓮は故人と遺族の関係を死後の浄土のありさまも含めたストーリーとして書き記すことによって、死別の悲しみにある者がその人生に新たな意味づけを与える手がかりとしている。日蓮の手紙は、現代のグリーフケアの理論にも通じる手法を用いて、人々の悲しみや苦しみを徐々に癒し、解放する方法を示したものであったといえる。

第三に、日蓮と忍性については、従来の研究では日蓮の政治批判を伴う「布教伝道型」の仏教福祉と忍性の「慈善事業型」の仏教福祉というように、対比的に捉えられていた傾向があった。また、忍性の慈善救済活動自体は肯定的に評価されつつも、慈善救済事業を行うための資金の調達方法や、僧たちの宗教的な「功利主義」的側面、あるいは救済を受ける人々に対する精神的・人格的向上へ向けた教導の側面に、彼の活動の問題点があると指摘されていた。しかし、忍性の「十種大願」に見られる忍性の自己反省や大悲代受苦の思想、あるいは大乘仏教の求道者（bodhisattva 菩薩）の理想といった諸点について、普遍思想的な視点から見れば、対比的に捉えられる日蓮と忍性の思想の間に相似性・相同性を見出すことができる。すなわち、①深い自己洞察・自己の内省に基づく一人の宗教者としての自覚のもとで、敵対者たちに対しても善知識として認識するという人間観。②自分自身はあくまで身を律し、自己の内省を行いつつ、人々の苦しみをその身に引き受けることを誓いながら、他者あるいは社会と積極的に関わっていく「代受苦」の姿勢。③慈悲を実現しようとした大乘仏教の求道者（bodhisattva 菩薩）の理想、である。

日蓮と忍性の社会に対するさまざまな取り組みは、現代社会における仏教福祉の実現を考える上で、共に重要な意義があると考えられる。両者は共に、宗教者としての自己のあり方を厳しく見つめながら、他者に対して、社会に対して慈悲の実現を切に願い、目指していたからである。両者のそれぞれの思想の特徴や限界、あるいは独善的・功利主義的に陥る危険性を認識した上で、両者を「大乘仏教の求道者の理想を求めて現実社会に対峙した二人の仏教者」あるいは「慈悲行を実現しようとした二人の宗教家」として捉え、対比的考察ではなく共通項を探っていく研究が今後必要である。

結論として、仏教福祉とは、「縁起」の理法に基づき、自己の内省を通して自他を尊重し、自分も相手も害さない・傷つけない種々の方法論によって善をなし、「福祉（利益・幸福・安楽）」の実現すなわち他者への感謝と尊敬をもって人間的成熟と社会の平安を目指す、「慈悲」の実践であるといえる。

そして、仏教福祉の思想と種々の実践方法は、現代の社会福祉・ソーシャルワークやカウンセリング・グリーフケアの思想や理論が目指す目的と方向性を共にしている。しかし、仏教福祉の思想は、そうした思想や理論がもつ問題点や限界点を超えて、より望ましいあり方を示していると考えられよう。